KIITO NEWSLETTER 028

俳句とクリエイティブ

連載企画　神戸くらしはじめました／○○さんの神戸めし：上野真人さん／世界のデザイン都市ガイド：ビルバオ

俳句とクリエイティブ

KIITOでは、神戸を巡って俳句をつくることで街の魅力を捉え直す試みとして、吟行句会〈Gabarito KOBE〉を開催しています。吟行とは、俳句の題材を求めて参加者と出かけること。〈Gabarito KOBE〉では、吟行で生まれた俳句を無記名で披露しあって句を選ぶ場＝句会までをセットにして行っています。今回のニュースレターでは、そんな〈Gabarito KOBE〉の紹介とあわせて、俳句とクリエイティブについて考えてみます。

コーディネーターの酒井匠さんに聞く〈Gabarito KOBE〉の目指すところ。

—どうしてKIITOで俳句の企画を？

俳句のひとつの側面として、ある物、ある景色を見て、それを言葉で切り取るという面があります。〈Gabarito〉では「街の魅力再発見」と謳っていますが、俳句の吟行というスタイルをとれば、そのことをすごくわかりやすく、楽しい遊び方として提示できると考えました。

—吟行といえば、一般には風光明媚な場所を訪ねるものだと思われています。

そうですね。だけど、俳句の対象になるものは決してそれだけではないし、同時に、神戸の魅力も観光名所やきれいな景色だけでもない。実際、何の特徴もないと思われている場所だったとしても、そこを面白がることができる余地があります。そこに目を向けることは、街との関わりとしても、俳句の関わりかたとしても面白いだろうと思っています。

—ゲストに招く俳人はあえて県外から。人選にもかなり独自色が出ています。

オルタナティブな俳人というのかな、一見、カジュアルに見える言葉の使いかたをする方にお願いしています。現代の風俗が出てきたり、びっくりするような言葉を使ったりされるけど、俳句の世界でもきちんと成立している、そんな方々ですね。

—俳人だけでなく、もうひとり、神戸ゆかりの文化人を招くのも〈Gabarito〉のスタイル。

句会というのは、誰とやっても面白いかといえば決してそうではなくて、俳句経験の有無を問わず、言葉選びや物の見かたが気になるという人とやる方が面白いんです。「俳句をやったことない人代表」みたいな立ち位置としてもお願いしています。

—過去3回開催してみての手応えはどうでしょう。

タイトルを横文字にして、チラシのデザインもコラージュの手法でお願いするなど、意図的にひと目で俳句イベントだとわからないようにしていますが、まったく俳句未経験という方の参加はまだまだ多くなくて。あと、街を歩く吟行の後、KIITOに戻ってきてからは、いわゆる句会のフォーマットで進行しています。そのやり方にもまだ練るべきところがありそうです。ただ、句会をご存知ない方にはそこが好評だったりするので難しいですね。吟行、句会というのは、やっぱり遊びとしての強度があるんだなとは感じています。

→次回開催日は調整中。KIITOのウェブサイトでも告知します。

酒井匠

1983年東京生まれ。
2016年より神戸在住。
イベントコーディネーターとして活動。俳句同人
「傍点」所属

〈自己紹介代わりのおススメ春の五句〉

歩き出す仔猫あらゆる知へ向けて　福田若之
春は曙そろそろ帰ってくれないか　櫂未知子
ミス卑弥呼準ミス卑弥呼桜咲く　茨木和生
たんぽぽのぽぽのあたりが火事ですよ　坪内稔典
蛤のワープ（そんなに遠くない）　長嶋有

第1回

場所：新開地・湊川エリア（東山商店街～ミナエン周辺～福原）
ゲスト：北大路翼（俳人）、**塚原正也**（山羊研究家）

台風直撃の予報に参加辞退者が続出。少人数での開催となった分、句会でのディスカッションはかえって濃密なものとなりました。北大路翼さんが率いる新宿歌舞伎町俳句一家「屍派」のメンバーも、東京や他県から参加してくれました。2018.7.28開催

冷やしあめ、籐枕、蠅叩き……現代ではなじみが薄くなった季語が、湊川の商店街でリアリティを帯びました。四句目の魚屋と八百屋の混同（？）が当日の暑さを物語っています。どこかのどかな日中の福原を詠んだ句も目立ちました。

〈当日生まれた俳句から〉

柄杓よりこぼれて金のひやしあめ（くらげを）
アーケードの風吸いこんで籠枕（咲良あぼろ）
乾物屋たしかに蠅叩きをふるふ（北大路翼）
あついな～八百屋の魚になりたいな～（後藤大樹）
客引きの打ち水昼のソープ街（酒落神戸）

第2回

場所：元町高架下
ゲスト：榮猿丸（俳人）、**安田謙一**（ロック漫筆）

7番街から元町駅までの一本道を、各自買い物などしながらゆっくり辿りました（安田謙一さんは「詩吟コンダクター（プロ用）」なるものをご購入）。1年を通して薄暗い高架下で、季節感を探すのに、皆さん苦心したようでした。2019.2.23開催

中古レコードを掘るワクワク感や、ジャンク屋の電子部品から発想を飛躍させたファンタジーなど、多様なモトコー句が。四句目「春の駅」は、暗い高架下から元町駅前に“漏れ出”て春を感じた我々の気分ともシンクロします。

〈当日生まれた俳句から〉

手を入れてレコードぬくし抜きはじむ（榮猿丸）
トランジスタにて繋がれり春の星（ノクチソラト）
キューピーの高くかかげている真昼（八上桐子）
幼子が「漏れる漏れる」と春の駅（有吉結子）
春日射すエバラのたれの空瓶に（酒井匠）

第3回

場所：ポートアイランド（市民広場駅周辺～北公園～ポートターミナル駅）
ゲスト：松本てふこ（俳人）、**Tsudio Studio**（ミュージシャン）

薄曇りで比較的暖かい午後。途中ポートライナーにも乗車し、計4駅分を巡りました。寂しさ、のどかさ、硬質さなど、読む人によって感じ方が分かれる句が多かったのも、新年のポートアイランドならではという気がします。2020.1.12開催

誰も出社していない空っぽの巨大な会社や、空いていて幅広い道に停車して休息をとるタクシーは、実際に歩いて印象に残った景色。四、五句目には、ヴェイパーウェイブ的な、バブル時代に対する憧憬・郷愁と批評性も感じます。

〈当日生まれた俳句から〉

焼諸や社章の旗のだらりとす（山田祥雲）
北風の死角で踊る運転手（Tsudio Studio）
ひとりには広きソファよ松の内（松本てふこ）
春隣地球を担ぎ上ぐオブジェ（常原拓）
初夢はひしゃげたホテルで浮いて見る（野中貴子）

俳句からクリエイティブを学ぶときがきた

五七五のたった十七音の言葉で世界を切り取る俳句は、誰もが知る文芸にして、優れた俳人の句は世界の見えかたを変えてしまうほどの力があります。
日本でも指折りの俳句結社「鷹」を率いる俳人の小川軽舟さんに対するは、デザイン・クリエイティブセンター神戸 センター長を務める芹沢高志さん。俳句はまったくの素人ということですが、意外な俳句との接点も見えてきました。

対談：小川軽舟（俳人）×芹沢高志（KIITOセンター長）

デザインでありアートである

芹沢：僕は俳句のことを何もわかってなくて今日は緊張しています。俳句といえば、子どもの頃にかわいがってもらってたおじさんが亡くなった後にね、句集が送られてきて、読んでびっくりした経験がある。おば達から生活能力が全然ないって言われてたおじさんが、こんなことを考えてたんだって。渡辺白泉という人なんですけども。

小川：それは驚きました。とても偉大な方ですから誇りにされていいと思います。

芹沢：廊下の奥に海坊主がなんだって句がありますよね。

小川：〈戦争が廊下の奥に立つてゐた〉ですね。新興俳句の金字塔です。

芹沢：そうなんですね。

小川：私は、主宰する結社「鷹」で毎月、雑誌を出していますけど、主宰になる前はその編集長をしていましたので、そこで装丁をお願いしたデザイナーがいまして、その方のデザインを通して余白の大事さを学びました。俳句という詩形もたった十七文字しかないので、余白がすごく大事なんですね。そのデザイナー、山口信博さんには私の第五句集『朝晩』の装丁もやっていただいて、タイポグラフィと余白を活かしたデザインになりました。

芹沢：話をわかりやすくするためにデザインとアートを分けると、デザインというのは、まず地域や社会のニーズなどの問題が設定されていて、それを解決するために最終形を意識して動き出すところがあります。収束させる意識が強くなる。対してアートは、頼まれもしないのに勝手に問題を発見したり問題提議をして、可能性をどんどん切り拓いていく。そう考えたときに、俳句というのは、五七五の型に収束させるデザイン的なベクトルが働いてるなと思うけど、何気なく見ていた景色の見えかたをガラッと変えちゃうような、そこはアート的な面もあるようで、デザインとアート両者のいい面を合わせ持っているように見えますね。

小川：そう言えるかもしれません。〈秋風や模様のちがふ皿二つ〉、これは原石鼎による大正時代の作ですけど、秋風と模様の違う二枚の皿という全く別のものを組み合わせて、どう感じるかは読者におまかせしましょうという句。「取り合わせ」といいますけど、五七五といってもただ十七文字が並ぶのではなく、五七五という型の中で、それを活かすためにいろんな工夫をしているという点で、芹沢さんのおっしゃるデザイン的といえる面があるのかなと思います。

芹沢：そうですね。

小川：一方で、〈銀行員等朝より蛍光す烏賊のごとく〉という句。これは、金子兜太が日銀の神戸支店に勤めていた頃の作ですが、五七五の定型には全然収まっていないけれど、五七五のリズムと勢いがあります。蛍光灯のもとで働く銀行員らがイカのように見えるという発見など、芹沢さんが言われるアート的な面がある。原石鼎は伝統的古典的なつくり方で、金子兜太は前衛的と言われるスタイルですが、そのふたつのベクトルの間に、さまざまな俳句がつくられてきました。

芹沢：〈秋風や〉の句にしても、定型に収めるという点では古典的なのかもしれないけど、思いがけないふたつを組み合わせるという点では、僕なんかはアーティスト的な面を見てしまいますね。近々のアートの例でいえば、西尾美也による「感覚の洗濯」という作品を思い出しました。銀座で洗濯物を手洗いして路地に干すというものですが、日常の惰性を壊すというのか、論理的に考えると出てこないような発想があって、俳句にもそれと同じような力を感じます。

小川：銀座で洗濯、まさに「取り合わせ」ですね。俳句でいえば、ふたつの意味がある程度、離れている方が読者のイマジネーションを刺激するんですよ。

芹沢：わかる気がします。

小川：五七五の短い言葉だけではすべて説明できないわけですから、その先は読者それぞれの記憶から引き出されるものに委ねることになります。

挨拶性と座の意義

芹沢：俳句といえばもうひとつ思い出したことがあって、僕の妻が翻訳した本にブルース・チャトウィンの『パタゴニア』という本があります。彼がパタゴニアを旅してテキストを書く引き金になったのが、芭蕉の『奥の細道』なんですね。ペンギンブックスの翻訳では、"The Narrow Road to the Deep North"。だから、彼はディープサウスを目指したって言うわけ。ずいぶん昔、彼と新宿で飲む機会があったんだけど、いろんな俳句の話が出てきて、でも、こっちに知識がない上に英語でしょ。あのときほど飲みながら頭が痛くなったことはない（笑）。

小川：芭蕉というのもずいぶん禅の勉強をしていた人ですけど、西洋では禅の思想とあわせて俳句が理解されていったところがありますね。

芹沢：そうか。チャトウィンもすごく切り詰めた文章、主語と動詞だけで書いてるから、翻訳はすごく大変だったみたい。

小川：ちなみに、芭蕉がどうしてあれだけ旅をしたかといえば、各地を旅して弟子を増やすという営業的な要請もあったわけですけど、いろんな土地のローカリティに出会いたかったんですね。とりわけ『奥の細道』の場合は、歌枕を訪ねるという目的がありました。和歌でよく詠まれる土地のことを歌枕といいますけど、芭蕉はその下調べをしたうえで地方を訪ねて、その土地の人と一緒に連句を巻くわけです。

芹沢：連句というのは？

小川：五七五、七七、五七五、七七…と交互に詠んでいくもので、歴史的には連歌という和歌から始まっています。連句の最初の五七五は発句と言いますが、発句ではその土地に対する挨拶の気持ちを込めろというのが芭蕉の教え。たとえば、芭蕉が神戸を訪ねたときには、〈ほととぎす消行方や島一ツ〉という句を詠んでいます。須磨の山から淡路島の方を眺めた句です。訪ねた土地や土地の仲間に向けた、挨拶性というのは俳句の大事な要素です。俳句はひとりで孤独にやるものではないですから。

芹沢：僕くらいの理解度からすれば、俳人も小説家なんかと同じように部屋にこもって、頭をかきむしりながら孤独に創作してるイメージでした。そうなんだな、俳句はひとりぼっちでやるものじゃないんだ。それはむしろ、とっても現代的だと思うな。

小川：連歌や連句という座の文芸から俳句は生まれていますから。それを明治になって、正岡子規が発句の五七五だけをとって、ひとつの詩形に定めたわけですけど、座の文芸としての記憶をまだ残していることが、今の時代にしてみれば逆によかったのかもしれませんね。

芹沢：ほんとそうだね。

小川：そして、そのときに正岡子規は写生という理念を持ちこみました。〈翅わててんたう虫の飛びいづる〉、これは写生の名手として知られた高野素十の句ですけど、みんな見たことがある場面だけど、ここまで見ることはできていなかった。そこを言葉で書き表したときに写生は成功します。だからどうしたって思う人もいるかもしれませんが、俳句の世界では、どんなささいなことでも言葉で何かを発見したら、それはもう世界を動かすほどの発見なんですね。

芹沢：そういう衝撃みたいなものも俳句の魅力ですね。

意味を求めない、泣かない文芸

小川：俳句って意味がないというのは大事なところで。意味を求めずに、置かれた言葉だけを読んで、あとは読者に考えてもらう。もちろん、言葉のひとつひとつには意味があるけど、言葉を素材として使っているところがあります。

芹沢：言葉で説明できるようだと面白くないのは、まさにアート的だと思います。それをまた、言葉で説明できないことを言葉でやっているというのがすごいよね。それにしても、五七五って極端に短い。なんでこんなにも言葉を切り詰めたんだろうって素朴に思ってしまいます。

小川：短歌だとこれに七七がつくので、そこで泣けるんです。でも、俳句ではそれができない。泣かない文芸なんですね。

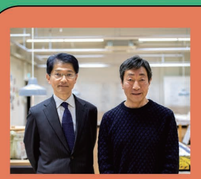
芹沢：その比較はわかりやすいな。逆にいえば、七七を足すだけで人を泣かすというのもすごいけど（笑）。そういえば、うちの妻の母が70歳すぎてから俳句を始めていました。有望な若手なんて言われたりして。特に文学や芸術に強い興味を持っていた人ではなかったけど、70歳過ぎて始められる敷居の低さが俳句にはありますよね。もしもこれが、70歳で現代アート始めたという話だったらみんな驚いちゃう。

小川：確かに俳句というのは特殊な文芸で、俳句の読者はほぼ俳句をつくる人。自分でもつくっているからこそ、他人の俳句がよく読めるという面があります。ただ、俳句の表現の歴史でも難解でわけがわからないと言われたものが、今ではスタンダードな句になっていたりして、大衆性と芸術性をどう両立させるか、そこは、俳句も悩みながら少しずつ表現の領域を開拓してきたんだと思います。「ホトトギス」の高浜虚子という俳人が非常に上手でしたね。俳句をみんなにわかりやすいものにしながら、優れた俳人には競わせて。

芹沢：そういう俳句のやり口を現代アートも見習わなきゃいけないな。現代アートもよくわからないと言われることが多いけど、それに対して難解な哲学とかを持ち込んで意味をわからせてやろうって、その次元で勝負しちゃって、かえって本人もわからなくなったりして（笑）。今は、地域での芸術祭が増えてきて参加型の作品が要請されるから、そのニーズを満足させようという面が強くなりすぎると、アーティストは置き去りになってしまう。ただ、残酷なことを言えば、やっぱりそんな環境も突き抜けるだけの力を持ってるアーティストっているんだけどね。けど、それはマニュアル化できないし、みんながなれるものでもないから。

小川：俳句ももちろん、簡単そうに見えて簡単ではないんです。けど、始めてみないと何も始まらない。ひとりで日記帳の隅に俳句を書いていても、それはまだ俳句になってないとよく私は言うんですけど、読者が句を読んで、その人の頭の中で作用が起きてはじめて、俳句になるんです。だから、俳句をつくって、それが読まれる機会を持つことがすごく大事。まさに句会ということですけど。

芹沢：ひとりでやってても無意味だっていうのは、ほんとそうなんだよね。アートやデザインでも、句会のような切磋琢磨する機会があって、それが楽しい場ができたら…俳句にはいっぱいヒントが詰まってるなと思わされました。ありがとうございます。



〈小川軽舟　自選五句〉
ソーダ水万程式を溜らしけり
個数は必ず割れて春かもめ
泥に降る雪うつくしや泥になる
死ぬときは箸置くやうに草の花
夕空は宇宙の蔵春祭

写真左：小川軽舟
1961年千葉生まれ。俳句雑誌「鷹」にて藤田湘子に師事。2005年、湘子逝去にともない「鷹」主宰を引き継ぐ。句集に『近所』『手帖』『呼鈴』『朝晩』など。毎日新聞俳壇選者を務める。

写真右：芹沢高志
1951年東京生まれ。デザイン・クリエイティブセンター神戸 センター長。別府現代芸術フェスティバル「温泉温泉世界」総合ディレクター（09、12、15年）、さいたトリエンナーレ2016ディレクターなど、各地のアートプロジェクトに関わる。

KIITO: NEWS & TOPICS / 2020 SPRING

What's on

「ちびっこうべ2020」開催決定！

「暮らしを豊かにするデザインを子どもたちにより身近に感じてほしい」という思いからはじまった体験型のワークショッププログラム「ちびっこうべ」。プロとして活躍するクリエイターから、子どもたちがさまざまな知識や技術を学びながら夢のまちをつくりあげます。子どもたちの創造力からどんなまちが誕生するのかお楽しみに！

CREATIVE WORKSHOP ちびっこうべ2020

夢のまちオープン：
2020年10月4日（日）、10日（土）、11日（日）
展示期間：2020年10月6日（火）～9日（金）、13日（火）～16日（金）
特設サイト：http://kiito.jp/chibikkobe/
Instagram：@chibikkobe
主催：デザイン・クリエイティブセンター神戸

ちびっこうべ2018ゆめのまちより（撮影：辻本しんこ）

News

ライフスタイルとクリエイティブの関係とは？

デザイン的視点を基軸に世界の多様な価値観や日本との相違点を現地でのリサーチや取材をもとにさまざまなアウトプットで紹介する「Form」による展覧会。第一弾は"デザイン大国"スイスにフォーカスし、ヴィジュアルコミュニケーション、書体デザイン、デザイン教育、ワークライフバランスなどの紹介を通し、小さなまちから世界に向けて発信するクリエイティブな実践を紐解きます。

Form #1：FROM SWISS
（フォーム #1: フォームスイス）

2020年7月11日（土）～26日（日）
主催：Form、
デザイン・クリエイティブセンター神戸
公式ホームページ：https://formtokyo.com/

パオロ・ヤヌッチへのインタビュー
（ラモーネ、スイス）© Simone Cavadini

Report

ニューヨークの「災害＋クリエイティブ」を、震災25年の神戸で紹介

震災25年を迎えた神戸で、ニューヨーク・パーソンズ美術大学の「災害＋クリエイティブ」をテーマにした学生作品を紹介する展覧会を開催。2013年にKIITOから始まった「EARTH MANUAL PROJECT」が目指す「防災の知識やアイデアを、国境を超えて共有し、連携し、教えあうプロジェクト。」の実現となりました。

「災害＋クリエイティブ」展
-パーソンズ美術大学での実践と
阪神・淡路大震災から25年の軌跡-

2020年1月15日（水）～ 31日（金）
主催：デザイン・クリエイティブセンター神戸
後援：神戸大学減災デザインセンター

1月18日にパーソンズ美術大学のカークライド学部長、神戸大学減災デザインセンターの機構副センター長を招いてフォーラムを開催

神戸ぐらしはじめました。

神戸への移住、最近増えているそうです。
神戸に越して間もないあの人に、気になる質問をぶつけてみました。

8人目

八木橋恒治さん
（ミュージシャン）

八木橋真由香さん
（会社員）

神戸歴：4ケ月（取材時点）

移り住んだ先は元銭湯。
銭湯部分はどうなる!?

東京出身のお二人は、とあるきっかけで訪れた兵庫・湊川商店街の雰囲気を気に入って神戸下町エリアの物件探しを開始。銭湯付きの平屋という注目物件に巡り合いました。先住者の大量の荷物と格闘しながらの大掃除、生い茂るジャングルのような庭の芝刈りも東京と往復しながらせっせとこなし、ひとまず居住スペースを完成させました。引っ越してから飼い始めたという子猫の兄弟がうれしそうに走り回るリビングは、昔のかたちを残しつつ、壁塗りやリメイクが施されて落ち着く空間に変身。まだ片付け途中の銭湯部分は、音の反響の良さからギターを鳴らすのも心地よいそうで、イベントを開くなど人の集まる空間にしていきたいとのこと。もともと銭湯だった場所が、新たな形で動き始める予感がしました。

イラスト：安藤友美（KIITOスタッフ）

上野真人さんの
神戸めし

パルフェの「元町チキンカレー（+温泉玉子）」

味に一目惚れして店に通うようになったという上野さん。基本的に辛いものが苦手だそうですが、パルフェのカレーは大好き。コーヒーもカレーも同じで、甘みが乗った味であれば美味しく食べられるのだとか。どこまでも追究できてしまう食の世界に想いを馳せながら、ルーだけ大盛りにしてもらったカレーをぺろりと平らげていました。

パルフェ　県庁前本店［県庁前］
神戸市中央区下山手通4丁目6-10
成発モリハイツ102

08.上野真人さん
（LANDMADE）

スペシャルティコーヒーを扱う自家焙煎所を営む。KIITOでは「神戸珈琲学」で講師を務めた。

5問でわかる
世界のデザイン都市ガイド

デザイン都市って何？ 世界の「デザイン都市」担当者に共通の質問を投げかけて解きほぐします。第15回はバスク語とスペイン語、旧市街と現代建築が混ざりあうスペインのビルバオから。

Q1「ここぞデザイン都市！」というスポット / Q2ビルバオのまちを舞台にした作品のオススメ / Q3最近、一番驚いたこと / Q4ハマっていること / Q5デザインをひと言でいえば

Vol.15　スペイン・ビルバオ ｜ Bilbao

1 フランク・O・ゲーリー設計の「ビルバオグッゲンハイム美術館」。1909年建造のワイン貯蔵庫をリノベーションした文化複合施設「アスクナ・セントロア」。

2 2016年の映画『ゲルニカ（Guernika）』。1937年に起きた史上初の都市無差別爆撃と言われるゲルニカ爆撃を通して、スペイン内戦の真実に迫った作品です。

3 量子物理学についてのハッカソンを開催したところ、そこで生まれた有益な結果に驚きました。

4 視覚芸術分野の支援を目的としたプログラムの再構築。

5 デザイン＝可能にする、容易にする。英語ではEnable、スペイン語ではFacilitar、バスク語ではAhalbidetuという言葉になります。

答えてくれた人

Maria J. del Blancoさん

ビルバオ経済開発庁（Bilbao Ekintza）の経済戦略部門のマネージャー。クリエイティブ産業、デジタル経済、先進サービスに関連するプログラムを担当し、デザイン都市ネットワークを通した国際的な連携にも取り組んでいます。また、「ビルバオデザインウィーク」をはじめとするデザイン分野のイベントにも関わっています。

今号のデザイナー ｜ 三重野龍　2011年京都精華大学グラフィックデザインコース卒業。大学卒業後から、京都にてフリーのグラフィックデザイナーとして活動開始。

KIITO NEWSLETTER
VOL.028

2020年3月発行

「KIITO NEWSLETTER」は、
デザイン・クリエイティブセンター神戸（KIITO）が
年4回発行する情報誌です。
センターのコンセプトである+クリエイティブな
活動を発信していきます。

発行：デザイン・クリエイティブセンター神戸
編集：竹内厚［Re:S］
デザイン：三重野龍
写真、イラスト：飯川雄大

KIITO

ACCESS

阪神・阪急神戸三宮駅、JR三ノ宮駅
フラワーロードを南へ徒歩20分
国道2号線を超えた神戸税関東向かい
神戸市営地下鉄海岸線三宮・花時計前駅より徒歩10分
ポートライナー貿易センター駅より徒歩10分
※駐車場はございませんので、公共交通機関をご利用ください。

CONTACT

デザイン・クリエイティブセンター神戸（KIITO）
〒651-0082　兵庫県神戸市中央区小野浜町1-4
TEL：078-325-2235
E-mail：info@kiito.jp
開館時間：9:00-21:00
休館日：月曜日（祝日、振替休日の場合はその翌日）年末年始12/29-1/3
http://kiito.jp/